

人と水の物語

時の流れを映す 商都の川。 安治川

近代河川工学の基礎をもたらし オランダ人技師たち。



時代は流れ、
明治維新後、
成立して間
もない政府
は全国の川

を治め、水運の便を図る必要に迫られました。そこで、当時、世界最高水準の水工技術を誇っていたオランダより土木技師を迎え入れました。まず、明治5年（1872）、ドールンとリンドウの2人が来日。ドールンは日本最初の量水標を設置したり、土木技術書を著し、それまで少数の人の経験によって行われてきた河川事業を初めて体系づけしました。とくに著書『治水総論』は、近代河川工学の教科書といえるものでした。



エッセル（右）とデ・レーケ（左）
淀川資料館蔵

明治6年（1873）には、エッセルやデ・レーケなど、応援部隊も来日。やがて、オランダ人土木技師団は総勢10人となり、全国各地の治水事業で活躍することとなりました。明治8年（1875）、デ・レーケは、上流山地から流れてくる真砂によって埋まり、船が入港できなくなった大阪港を再建しようと上流の砂防工事を含む『阪港目論見』というプランを提案しましたが着工には至りませんでした。しかし、これをきっかけに淀川の上流にあたる滋賀県田上山のオランダ堰堤や鏡ダムの建設など、砂防を含めた治水事業が始められました。そして、明治27年（1894）、再び大阪市から依頼を受けたデ・レーケは、安治川河口に水深36〜8メートルの泊地をつくる『大阪築港計画』を作成。この計画に従って明治30年（1897）に着工、昭和4年（1929）には近代大阪港が誕生することとなりました。

”わがまち再発見！” 親子で体験する「川と橋めぐり」



西区役所企画総務課主査
西村 彰夫さん

安治川の流れを北にみる大阪市西区では平成11年8月1日、船による「川と橋めぐり」を実施し、区民から好評を得ました。今回は、この催しを担当する西区役所企画総務課主査の西村彰夫さんにお話をうかがいました。

このイベントは西区再発見、船による「川と橋めぐり」と題して、西区にお住まいの小学校5年生以上のお子さまと保護者の方を対象に、約50組の親子を募集。日頃は見ることでできない川からの眺めを通してわがまちを再発見するとともに、川にじかに触れ、川の言い分も聞き、風や匂いにもふれ、その実態を肌で感じてもらうと始めたものです。

当日は、西区在住の郷土史研究家の講座を交えながら、安治川を起点に土佐堀川、堂島川、木津川、道頓堀川をめぐる約2時間のコースを航行し、船上からの景色を体験しました。

テキストとして参加者に配布した『埋もれた堀・川と昔あった橋』には昭和頃頃の西区の情景が紹介されていて、当時を懐かしむ方も多数おられました。かつては西区を縦横に流れていた堀・川や古い橋の多くは、今は市内の幹線道路や高速道路の高架下となって姿を消してしまいましたが、船の上から眺めると往時の名残を見つけることができました。これからも、この企画を定期的な催しとし、わがまちの良さを知ってもらいながら、一人でも多くの方に河川環境を考えていただき、良好な水辺となるよう努力していきたいと考えます。

